

20 周年記念シンポジウム -2**財団設立の背景とその経緯**
Outline of JBF establishment

川島拓司

(公財)日本ビフィズス菌センター前総務局主幹

Takuji Kawashima

Former Chief of General Affairs Bureau, Japan Bifidus Foundation

【背景】

肝病変にともなう最も治療が困難な昏睡症状を示す肝性脳症はビフィズス菌優勢の腸内細菌叢に改善することで、血中のアンモニア濃度が低下し、軽い作業ができるほどに患者は回復するという明快な治療成績が1965～1975年頃に多く報告された。これはその後の腸内細菌叢改善に関する研究を勢いづけた。多くの研究者らはこの肝性脳症の治療報告から Tissier が提唱したビフィズス菌、乳酸菌優勢の腸内細菌叢変換療法の意義、Metchnikoff が「長寿の研究」で述べている腸内腐敗の抑制に有効な乳酸菌利用の重要性を再認識させられたと思える。それはその後の関係研究会、学会の活動を活発にし、研究者を有用菌の分離と実用化、機能性オリゴ糖の探索・開発に向かわせ、さらに新たに定義されたプロバイオティクス、プレバイオティクスの概念を抛りどころとした研究開発を大きく前進させることになったといえよう。当財団事業はそれらの推進に幾分かの貢献ができたものとみている。

【経緯】

1. 「ビフィズス菌腸内増殖に関する研究会」の発足

当財団の前身である「ビフィズス菌腸内増殖に関する研究会」〔田村先生（後述）主導〕が上記のような趨勢のさ中、1971年11月17日に開催された。以降、この会は本間 道（当時獨協医科大学教授）、田村善蔵（当時東京大学薬学部教授）、中谷林太郎（当時東京医科歯科大学医学部教授）及び光岡知足（当時理化学研究所主任研究員）の4人の先生が連携されて年に1～2回定期的に開催され、財団発足後も暫く続けられた。その在り様は当センター ホームページに掲載の「財団の歩み」（中谷元理事長の詳記）にある。本研究会の継続については4人の先生方を中心に関係の諸先生及び世話係の関係企業4社が協同で行い、この産学協同で事業に臨むという態勢は財団発足後も受け継がれている。

2. 「財団法人日本ビフィズス菌センター」の設立

上記の研究会を学会に発展させる具体策は38年前の1978年7月27日に学士会館分館（本郷）で開催された設立準備会議前予備会議において上記の4先生が立案された事業計画が基礎となった。その理念は人間の生存に関する環境因子として重視されなければならない「内なる環境因子としての腸内細菌叢」に焦点を合わせた学際的な学問の推進を図ることにあつた。事業団体としては議案を理事会及び評議員会の審議で迅速に議決される財団法人とする基本路線が決められた。名称は「日本ビフィズス学会」を原案とされたが、「財団」を目指す事業団体が「学会」と称することは認め難いとの見解から文部省担当官の提案により、省内検討の初期においては「学協会」となった。1981年4月1日付の認可時において、名称は再修正されて「財団法人日本ビフィズス菌センター」となり、基本財産6,000万円、運用財産1,000万円の資産状況で発足することとなった。この財団資産は関係領域における学際的な研究への取り組みを推進する事業目的をご理解いただいた薬系、食系及びその他企業の計26社からの醸出金によるものであり、各社のご協力により財団法人として発足することができた。発足後も特別会員（前賛助会員）、団体会員として多くの企業からご支援をいただき、さらには個人会員の方々のご協力のお蔭で今日まで財団としての形態を財政面で維持することができている。また、理事、監事、評議員及び各委員会委員の諸氏のご尽力により、発足から35年に及ぶ今日まで財団事業を継続、発展させていただいている。これらの財政及び事業の両面における各位のご支援、ご協力に財団設立準備の当初から世話係を務めてきた者の一人として改めて感謝を申し上げる。